

総合ビジネス専門学校改革に関する意見交換会について

- 1 日 時：令和4年7月29日（金） 10：30～12：10
- 2 場 所：総合ビジネス専門学校 秘書実習室・学生ホール
- 3 参加者：生徒、教職員、遠藤教育長、小屋松委員、西山委員、出川委員、澤委員

	教育委員	生徒	教職員	計	会場
Aグループ	1人 遠藤教育長	2人 情報ビジネスコース2年1人 経理ビジネスコース2年1人	3人	6人	秘書実習室
Bグループ	2人 西山委員、澤委員	3人 情報ビジネスコース2年2人 経理ビジネスコース2年1人	3人	8人	学生ホール（左）
Cグループ	2人 小屋松委員、出川委員	3人 情報ビジネスコース2年1人 経理ビジネスコース2年1人 観光サービスコース2年1人	3人	8人	学生ホール（右）

4 交換会内容（秘書実習室、学生ホール）

開会                    趣旨説明

学校説明              現在の取組状況・改革を進める上での課題等について  
                             校長、学生自治会長が説明

意見交換              （議題例示）

（1）授業改善を進める上での課題

- ・ ICT 機器の活用、多様な授業形態に対応した教室、  
   専門人材の確保など

（2）『学生自治会』～今後の生徒の取組～

- ・ 生徒の学校運営への参画を進めるためには

（3）起業家教育のこれから

- ・ 新しい授業の取組～これから望まれる授業とは～

教育委員所感

閉会

## Aグループ（遠藤教育長）

(教育長)今日は意見交換会よろしくお願ひします。最初に発表者を決めてくれとのことでしたので、生徒のお二人のどちらかでお願ひしたいと思ひますが、いかがですか。

(生徒)私がやります。

(教育長)よろしくお願ひします。今日は3つ議題が例示としてあります。1番目は授業改善を進める上での課題となっておりますが、これは、学生や先生方に何か言いたいことがあるという前提でいいですか。1番はどなたでもいいですが、いかがですか。

(校長)授業されている方と受けている方からのお立場からいかがですか。

(生徒)まず、私たちが授業を受けている教室の椅子が硬いし、机も使いにくい。長時間の授業を受けている際、今座っている椅子と違い硬いので疲れてしまう。

(生徒)自分でクッションなどを持参している人もいる。硬いから自分のものを持ってきて疲れないようにしている人もいる現状です。

(校長)机はどうですか。

(生徒)机も動かすことが出来ない。グループワークを行う際に女性では持ち上がらない重さで机自体を動かせない。

(教育長)固定されているということですか。

(生徒)固定ほどではないですが、重くて動かしにくい。女性だと二人がかりでないと動かない。

(教育長)今意見交換会している部屋の机椅子とは違って、授業の場面に応じた机の配置はできないということですね。

(生徒)授業によっては、移動教室で今意見交換会をしている部屋を使うことはあります。

(教育長)この部屋の後ろにいっぱい椅子がありますが、それを使うことはできないのかな。

(校長)実はここの椅子と替えようと思っていて、数が足りるか調整している。新しい授業をするための机と椅子にしたいと思っているのので、改革に合わせて来年度の予算要求を検討していきたい。

(教育長)わかりました。日頃一番長く使う教室の机椅子ですよね。快適であることはもちろんでしょうけど、授業に合わせた使い方ができるようにしていかななくてはけませんね。その他は何かありますか。

(生徒)授業で情報を扱っており、パソコンを使うことが多いですが、パソコンの立ち上げの時間がかなり長くなる。自分の使用しているパソコンに比べると10倍から20倍くらい遅い。

(教育長)それは、市役所のパソコンも一緒に、電源ボタン押して、トイレに行って、戻ってきてもまだ。

(生徒)時間のロスはあると思ひます。

(教員)一応、今年更新されるので改善されると思ひます。今の機器が5年前の物で最後の年で無理しているのは事実です。

(教育長)更新したら改善されるんですね。

(教員)先ほど机椅子の件もありましたが、今年パソコン室をリニューアルするにあたっては、現在のスクール形式の部屋も必要だが、ノートパソコンを想定してグループでやりとりができる部屋、そして新しいクリエイティブな学びにつながるようなMACを想定したバリエーションを考えたものにしたい。学生の学びに合うようなものにしたいと考えている。

(教育長)今年の予算で色々その辺はついていたと思ひます。

- (教 員) 導入については世界情勢の関係で遅れてはいるが、年度内には入れると思う。現在、動画編集等は個人でしているが、そこも学校の学びの中で出来るようにしたいと考えている。
- (教育長) 確かに学校の物が、個人のものよりスペックが低ければ学校でやる意味が無いのではないか。
- (教 員) ありがたく耳が痛い話です。
- (教育長) いやいや、それは私たちの問題で、個人のものより良いものを学校に置かないと。そういう物はすぐに古くなる。ただ、学校は毎年買うことができない。専門人材確保はいかがですか。
- (教 員) パソコンが新しくなるのにも関連してくると思うが、学生に新しい学びを提供するサイクルが非常に早い。例えば、私たちが今ドローンの検定や撮影をやり動画編集を担当しているが、あと数年したらそれは一般化してしまうので、もしかしたら企業にしたらニーズが低いものになってしまう可能性がある。では、次新しいものにどのように取り組んでいかなければならないか、就職した時の強みになるものは何なのか、実際どのようなものがあるか。私たちも想像はしているが、それを教えることのできる人材、それをサポートして下さる人材、その人材を見つけて、専門学校に関わっていただけのことが大きいと思う。今、ドローンの講話を聞いても、講師の方は「もうそろそろドローンをやめます」と言われ、次のものにチャレンジされる。常に人材発掘しつつ、専門学校で講師として働いていただく必要があると思う。
- (教育長) 先ほど校長から説明された資料にもNTTドコモとかありましたけど、Facebookとかでもインターンシップが出来たら面白いと思う。熊本市は、ドコモもそうですし、Appleとも繋がりがあるから、そういうところを活用するのもあると思う。そういった人に来てもらって最新の情報をもらうといい。市立ならではというか、熊本市全体ではマイクロソフトもそうだし、色々なところとつながりがあるので利用していくといい。もちろんIT企業だけでは無く、例えばという話。市役所の方でも色々つながりがあり、市役所の研修講師とかでもいるので、出来るだけこちらにも紹介するようにする。学園大とか崇城大とかの大学もあるので、その大学の先生に紹介してもらうのもいい。
- (校 長) 学園大学の新改先生や崇城大学の川副先生は非常に協力的。
- (教育長) そういった先生達が1回来てもらって話してもらう。1回話してもらったらまた次もお願いしますという感じであればいいのではないか。
- (生 徒) 経理ビジネスで簿記に詳しい非常勤の先生がいて、とても勉強になる。2級をとって上を目指そうとしている人もいる。常勤だといつでも聞けるので、常勤のスペシャリストがいい。1級を受ける人は独学で大変だと耳にする。出来れば詳しい先生が常にいるといい。
- (教育長) 中心となる科目は常勤がいいと思う。そのような人材がいるかというのも問題があるかもしれないが、簿記みたいにあまり変化が無い基本的な科目は常勤がいいと思う。総合ビジネス専門学校には、常勤の定員はあるのか。
- (校 長) 明確なルールはなく、予算に応じて配置するという感じです。
- (教育長) 定員ではなく、予算で決まっているということですね。小中学校だと定数がある。常勤で必要な人数は何人なのか、非常勤も同じく少し整理する必要がある。今、ビジネス専門学校で常勤が何人必要なのかを示してほしい。
- (校 長) 設置基準では最低の人数は示してあります。
- (教育長) もちろん、それは最低限の人数であって、今学校として、どのくらい必要だと考えているかを聞きたい。それが全部出来るかはわからないが、私たちとしても予算要求する基礎資料として、こういう教科があって常勤の先生はこれだけ必要ですよという資料は欲しい。考え方として、この科目は常勤、こっちは非常勤ということが言えればいい。今ちょうど学校

改革をしているタイミングなので、タイミングとしては非常にいい。上のステージに行くためには、そのようなことを考えていく必要があると思う。

(校長) 今生徒が言った課題というのは大きいし、教育長のご発言は校長として非常にありがたい。そこを踏まえた上で、常勤数等について示していきたい。

(教育長) 今9人でしたよね。それで足りるのか、そうじゃなくて常にどのくらい必要なのかを考えてもらえればと思います。他に何かありますか。

(生徒) 先ほどのパソコンとかの話に戻ってしまいますが、学校内にWi-Fiがあるが、使用率が高いと繋がらない。実際に就活で使うとなると、他の人は切らなくてとはいう状況。パソコンを使う上で厳しい現状である。

(教育長) それは厳しいですね。

(校長) 昼休みなどのアクセスが集中するとそのような状況になる。

(教員) 元々、e-netがあるが、就職関係で学生に提供する分としてWi-Fiを使っている。それが就職支援室を中心としたネットワークなので、学生が全員それに多数が接続するとパンクしてしまう。

(教育長) 教育用と就職用と別にあるということか。

(生徒) 学生は明確な分け方を知らずに使っているの、就職の方に影響をさせているのもあるかもしれない。Wi-Fiを使えない状況になるので、学校に来た時点でWi-Fiを切っている状況。

(教育長) そうなんですね。初めて聞いた。分けている理由は何か。

(教員) e-netは元々30メガまでしか速度が出ないようになっているので、それに全部がぶらさがることはできないし、e-netではWi-Fiが出来ない。

(教育長) e-netは有線のものだけを使っていて、Wi-Fiは学校独自のものを使っているという状況ですね。遅いのは回線の問題なんですか、Wi-Fiの機器の問題なんですか。

(教員) 単独で計測すると、200メガとか出るので、速度的には問題ないんですけど、一つの回線に対するクライアントが多すぎるのが問題。なので、それを解消するために、今年はLTEのタブレットを使ってもらっている。よってWi-Fiとしての不自由さは無いと思う。LTEなので、学生一人ひとりのオンライン説明会もしてもらっていますし、WEB面接もやっている。現在は問題なくやっている。今までは全部Wi-Fiにぶら下がっていたので、それが出来なかった。ただ、タブレットの連携協定が2年なので、その後のことは考えますけれども、今のところ2年間は使える状況。

(教育長) もっと回線を大きくすることはできないのか。

(教員) もちろん、出来ると思う。

(教育長) 小学校と中学校では順番に各学校でオンライン授業とかで動画を使ったりするので、各学校の回線を増設しようとしている。だから専門学校もやろうと思えば出来るのではないかと思う。教育委員会だどどこ話しているのか。

(教員) 指導課です。今年度の改修で、Macが入る部屋だけは、有線の別回線を入れてもらうことになっているが、学生向けのオンライン説明会やWEB面接では使用しないことになっている。

(教育長) 教育センターでまとめてできないのか。

(教員) e-netの実施対策手順にのっとったWi-Fiであればe-netでもいいのかもしれないが、今のところはまだ。

(教育長) 教育センターのICT関連予算でどうにかならないのか。

- (教 員) 今後、個人PCを持ち込み授業することも想定している。Wi-Fi環境の増強は必要になってくる。
- (教育長) それは教育センターに相談しましょう。
- (教 員) BYODではないが、学生に個人のパソコンを持ってきてもらって、どこの教室でも使える環境は良いと思う。
- (教育長) わかりました。良いと思います。学校のPCを使うより、自分のPCを使った方がいいという人がいると思う。次の議題である学生自治会はどうか。生徒の学校運営への参画を進めるためにはとなっているが。
- (生 徒) 卒業式や入学式にも参画したり、先日のオープンキャンパスも関わってきた。これから行われるスポーツ大会も中身をガラッと変えようと思っている。どのようなものをするかを学生がアンケートをとったりして動いている。また、例年になかった文化祭みたいなものも今年からやっっていこうと考えている。ただ、学生だけでは出来ないので、どのようにやっっていくかを考えているところ。
- (教育長) 生徒の学校運営への参画は、校長の一存で足りる。これに関する全権限は校長にある。
- (校 長) 学生が関わらないと学校が良くなれないと思っている。学生に主体的にやってもらいたい。今出ている文化祭等については、学生さんに来てもらいたい、本校のことをよく知ってもらいたい、狙いとしてはそういったところで一緒にやっっていく。あとはカリキュラムとか授業改善です。先ほど簿記の話もありましたけど、大学の先生が2人きていただいています。学生からの評価が非常に高い。人間的にも非常に良い。そのような声がダイレクトにあがってきて、授業改善に我々が活かしていける。やっぱり学生とそういったものを作り上げていきたい。
- (教育長) イベントとかを学生主体で作っていくのもいいんだけど、日常の学校運営、授業やカリキュラム等に学生が関わることが必要。普段から学生が学校のことを決めていく。そういう仕組みを作るということだと思う。小中学校でも校則見直しにおいて、自分たちのことは自分たちで決めるようにしている。小学1年生から自分たちのルールは自分たちで決めていく、そういった力をつけていかなければいけない。それは将来大人になって自分で社会をつくっていく力になると思う。小中学校でそれをする訳だから、専門学校では日常の段階でも出来ると思う。大人になっているので、十分に意思決定ができる。自分が関わった以上は、自分を含めてよりよいものしていく必要がある。社会に求められているのは、そのようなことではないか。自分がいることで、社会がよりよいものになっていく、自分の周りの人間や世の中を動かし、ビジネスをしていく。最終的に決めるのは校長だけど、当事者の意見を入れることは大事だし、そうしないと魅力的な学校にならないと思う。学生の皆さんの方が、今から入ってくる人たちの気持ちはよくわかっていると思うし、これから社会がどうなっていくかは大人の方が知っているのかもしれない。両方の意見で、学校を動かしていく。イベントだけでなく、日頃の学校運営の方向性を決める時にも関わるような仕組みをつくっていただくと、魅力的な学校になると思う。これからは、小学校、中学校、高校でそのような経験を積んできた人が入学してくる。そこで急に自分たちの意見が反映される場がない、というのは魅力を感じないと思う。学生自治会の方も学生の意見をいかに集約して学校運営に活かしていくかということがもっと難しいのではないかな。校長は皆さんの意見を聞きますよと言えいいんだけど、皆さんの意見はどうやってまとめるのかとなる。そこは苦慮されると思う。
- (校 長) 資料の27ページに新しい来年度からの教育課程があるが、全学生さんからアプリを使っ

て意見をもらった。アプリを使うと学生からダイレクトに意見をもらうことができる。現行の教育課程についてもカリキュラム検討委員会をしたんですけど、色んな意見が出ました。体育を週5時間やってほしいとかの意見もあった。体育5時間は認められなかったけど、先生方も生徒の意見だとよく聞いてくれる。職員会議等に出席されていかがですか。

(生徒) 校長先生と話ができる、その環境はありがたい。意見を言った際に、否定肯定だけでなく、改善もアドバイスしてもらえる。もし良い提案があったら、すぐに取り組ませてもらえるところもありがたい。

(教育長) 何でも意見を言えるということは、聞く側は全部聞く必要はないということでもある。逆に言われたものを全部聞かなくてはいけなかったら、聞ける意見しか言えない。何でも意見は言いたくだけ言ってもいいし、その代わりに、それを全部取り入れるかどうかは別問題。最初に校長から説明があった、学生推薦は画期的だと思う。誰を入学させるかということにも学生の意見を聞ける。意見を言えるっていうのは大事だし、それが反映できる仕組みがあることも大事。学生推薦で入った人は何人ぐらいですか。

(校長) 今の1年生は1人だけです。

(教育長) 全員が一人ずつ推薦するぐらいの勢いでもいいのでは。

(校長) 初めての制度で高校側に不安があるようだ。明確な不安ではないが、高校側は大丈夫なのか、とおっしゃる。しっかり説明すると納得はされます。もちろん校長推薦も学校推薦も落とすことはあります。落とすと学生との関係が悪くなるという心配もありますが、ミスマッチが防げるので学校としてはいい。学生が話を聞いて、学校にぴったりの人を推薦してくれる。そこが本来の狙い。

(教育長) 全ての学生が一人ずつ連れてくれば必ず定員は満たせる、ということですよ。他の人が入れなくなるのはまた問題ですけど。次の起業家教育のこれからについてはどうですか。

(生徒) この前、起業家の方の講義を聴いて良かった。今までそのような機会が無かった。自分で一生懸命考えてされていて、自分もいい勉強になった。学校の中だけではわからない。このような社会とつながる機会が増えれば、みんなも社会について考えることができると思う。

(教育長) どんな方が来られたんですか。

(生徒) 長崎大学の方で宮川チエさん。就職のマッチングアプリを自分で起業してやってらっしゃる。

(教育長) 私も起業した。文部科学省を辞めて、友達と2人で会社を作って、しばらくやって熊本市に来てるんですけど、やってみるとすごく学ぶことが多い。起業する、しないに関わらず、起業家マインドはこれからの社会には必要だし大事。公務員は起業と一番遠い。公務員は給料をもらえないということはないが、起業した人は、もしかすると明日仕事が来なくなるかもしれないという緊張感やストレス、スリルがある。仕事っていうのはそういうものだという意識で考えるのは、どんな社会人でも必要になってくる。質の良いものを作れば自然に売れるというわけではなく、まずどういうビジネスをやっていくのか、もっといえば、そのビジネスでどう世の中を変えていくのかを考えていく。どんな起業家でもいいので、起業したい人は起業している人から話を聴くのもいいと思う。起業していない人から聴くとか教科書で習うのとは違うものがあるはず。別に起業家ですという人でなくても、自営業の人はそうやっているんで、身近な人だと、パン屋さんとか八百屋さんとか、そのような人から聴くのもいいと思う。

(生徒) 自分も起業したいと思っている。起業をするために外部に出て学んだり、個人から案件を受けてやったりしている。起業するために学んだことは、起業しなくても活かせる。

(教育長) 何も知らないで行き当たりばったりで起業しても、ほとんど成功する確率はないと思う。基本的なことは学んでおく必要がある。もちろん、覚悟とか勢いとかがないといけない。成功する確率をあげるためにも学びは必要。学校で学ぶことはあるでしょうし、独学で学ぶこともあると思う。どのようなことをしたいの。

(生徒) カメラを使って編集をする映像関係をしたい。YouTube などの編集や結婚式のエンドロールの作成は今もやっている。結婚式はコロナが収まったら、人員が足りなくなることがあると思うので、起業してそこをやりたい。

(教育長) 起業するときに、雇われている経験も大事だと思う。実際、雇う側になった時にうまくいく。その経験が無くて起業するとうまくいかなくなるかもしれない。起業家教育は、学校内で学べることや教えることと、学校外でもできる経験をいかに出来るかが必要。学校で起業家教育の基本的な知識や理論を教えることはもちろん、あとはいかに学校の中ではできない経験をコーディネートして、そういった経験を出来る場を紹介できるかがとても大事だと思う。

(校長) クロスポイントは行かれましたか。どうでしたか。

(生徒) 学校みたいに来てもらって習うのと、行って習うのはその場の雰囲気が違うので他のものも吸収できる印象です。

(教育長) そういうところを自分で見つけることも良い。

(校長) クロスポイントには教職員の研修でも行かせてもらった。クロスポイントも連携してやりたいと思われている。あそこで授業できるのもいい。

(教員) クロスポイントもびびれずもそうですし、この前、リコーさんとも授業させていただいた。企業とどうやりとりするかを考えている。リコーさんの社員と一緒にグループディスカッションを行った。学校は授業としてやり、企業も社員啓発として行う。学生には、最後にプレゼンテーションをしてもらう。これからこのような力が必要だとか、社員さんからは、このような力を身に付けて会社に入ってきてくださいというのを、色んなところで、そのようなことをした方がいい。クロスポイントにも行くだけでなく、自分が作った起業案とかを起業した人に見てもらったりした方がいいし、これからやっていく必要がある。

(教員) 今まで聞いてきて、全部そうだなあと思った。前に戻りますが、自治会の動きの中で学生から、上級資格に挑戦するための補助金制度を自治会にほしいと提案があった。着眼点がいいと思った。起業家になるにしても自分が光るものを持っておく。そういった取組を奨励するのを学生の中から出たのがすばらしい。

(教育長) 学生の中で、自分たちのことだけでなく、後輩まで含めて考えていることはすばらしい。総合ビジネス専門学校は、私はすごく恵まれた環境だと思う。企業と連携できる、もっと金を稼げる学校になると思う。私がここの校長だったら、密かに考える目標は、日本一金持ちの学校にする。これだけお金を持っている企業と連携しているんだったら、企業から金をとって入学金とか無料に出来るのではないか。私たちも予算を取りますが、お金を稼げる人をつくる学校なので、学校も稼がないと。

本日はありがとうございました。

## Bグループ（西山委員 澤委員）

（西山委員）まず最初に、皆さんがどうしてこの学校に進学したのか、何のために進学してきたのか、資格を取得したいとか就職が有利だとかいろいろあると思うのですが、ここを出て将来どういう就職をしたいのかとか、そういう理由と、この学校のいい所、不満な所など忌憚のないご意見をお伺いしたいと思います。まず、太田さんお願いします。

（生徒）私がこの学校に入学した理由は簿記の勉強に興味があって、高校から簿記の勉強に携わっていたので、経理でもっと簿記を勉強したいと思って、入学したのが動機です。もう一つ入学する条件で考えたのが、学費が安くて、通学しやすいというのがあります。とてもいい条件だなと思って、それで入学しました。会計を教えてください先生がいらっしゃるんですけど、暗記の簿記ではなく、実践に基づいた理論でちゃんと組み立てていく、簿記会計の仕組みなどを教えてください、簿記については非常にわかりやすく身になっているので、今後は上級の資格を狙いつつ企業の経理部に就くの一番を考えているところです。

（西山委員）上級の簿記というと、日商簿記の2級、1級どれくらいでしょうか。

（生徒）とりあえず2級を取って1級もなんですけど、インターンシップに一度学校のプログラムで税理士事務所の方に行ったときに、税金関連のことを勉強しないと、簿記だけでは実践に役に立たないということが分かったので、簿記の勉強を並行しつつ所得税、法人税など税金の勉強を今しております、税金についてももっと勉強したいと考えております。

（西山委員）大体わかりました。この学校に不満なところはございませんか。

（生徒）不満な所は、特に、授業によって当たり前なんですけど先生方によってレベルが違うっていうのはあるんですけど、教え方にどちらかということと問題があるところがある。悪いと思うのが、先ほど言った会計の先生は質問を投げかけながら教えていってコミュニケーションをとる感じで、理論上で教えてください。良くない授業と言っては何ですけど、こちらが聞いているだけ、受け身になっているなというだけの授業。

（西山委員）一方的に教えるだけの

（生徒）そうです。身にならないというのが、ずっとしゃべり続けているだけなので、いつ問題を解いていかも分からないし、答え方もどうすればいいか分からないものがあるので、授業などに関しては、特に生徒の身になってしていただきたいというのが不満なところです。

（西山委員）ありがとうございました。では、藤本さんお願いします。

（生徒）私は他の方々と違って、一度、社会人を経験してから入学となっており、ちょっとみんなより年が上なんですけれども、入学したメリットというのがもともと自動車業界にいたためどうしても車とか工業関係の勉強ばかりしてたもので、一度、簿記とかプログラミング等を学んでみたいというところで、家からも近いし、学費も安いから、生活も維持できるということが本校を選択した理由です。本校のメリットとしては、学生が非常に伸び伸び学習できることと、学生自治会の取組もそうですし、色んなことにチャレンジしていける、それを校長先生、教頭先生他、教職員の先生方から後押ししていただき、学生がやりやすい、やりたいことに取り組みめるような環境にあるのは非常にメリットかなという風に思っています。

（西山委員）将来、どうされたいですか。

（生徒）将来は、また自動車業界に今度は総務職で内定が決まったので、この学校で簿記とか登記とか情報セキュリティーとかいろいろ学習したことを生かして、社会人としてまた復帰したいなという風に思っています。

（西山委員）わかりました。不満なところはないですか。



(生徒) 設備が古い。

(西山委員) 具体的にどんな設備が問題ですか。

(生徒) 学生がお昼とかに使う電子レンジや、エアコンのシステムもそうですけど、そういったものは今後解決できる課題とは思っておりますが、私としてはハード面がちょっと不安かなと。今後の学校改革に向けて、新しい子たちが希望を持って入ってくるので、その子たちの希望を壊さない学校づくりをしていきたいなと思います。

(西山委員) ありがとうございます。宮下さんお願いします。

(生徒) 私が本校への進学を希望した理由としまして、大きく二つございまして、一つが資格取得、高校在学時には資格を一つも持っていなかったもので、このまま社会人になっていいものかと考えて、高校のときは警察官志望で公務員試験の対策などしていたんですけども資格が欲しいなと考えて進学しました。

(西山委員) どんな資格を取りたいですか。

(生徒) 私は、ものづくりに興味があり将来的にプログラミング等の分野で活躍したいと考えています。そういった情報関係、プログラミング関係の資格を取得したいと考えています。現在も、情報セキュリティーと基本情報の資格取得を目標に、勉強に励んでいます。

(西山委員) わかりました。ここに来た理由として二つあるとおっしゃいましたけど、2番目は何でしょうか。

(生徒) そうですね、先ほども申し上げたように最初は公務員志望で就職を希望していたんですけども、いきなり進学するとなつて、親から学費等の面から、公立の学校を選んで欲しいとの希望があったので、その中で情報が学べる学校を探したところ公立の専門学校、情報系の専門学校ということでぴったりあつてかなと思ひ進学を希望しました。

(西山委員) わかりました。実際に入学して、この学校のいいところ悪いところ、教えていただけますか。

(生徒) いいところは、藤本さんもおっしゃったように、学生が主体となつて動ける自由度の高い校風です。本当に学生が希望することは、先生方がどんどん支援してくれて。僕もインターンシップ先など、先生が手伝って選んでくれたりして、すごく身になる体験が出来ました。悪いところは、逆にその自由度が高いから学生自治会に入るような主体性のある意欲のある学生もいれば、毎日遅刻するようならけた学生もいて、そういったところを足並みそろえて、学習できる環境などを今後作っていけるようになったら、学校全体としての資格の取得率が上がったり、知名度の向上に、行く行くはつながっていくかなと思います。

(西山委員) ありがとうございます。澤委員は今の話でコメントはありますか。

(澤委員) 藤本さんが社会人になってから学んでいらっしゃるということで、なかなか学校の中で社会人がいるというのは、大学とかでもあまりないと思いますが、周りの皆さんから社会人がいることで学びが深まるようなことがありますか。

(生徒) 意義がありますね。情報科では、ITパスポートの取得を推奨してるんですけども、藤本君が、全体をリードする流れで、クラス全体の学習を先導してもらっているような形で、あそこはやはり社会人経験のある藤本君のリーダーシップであつたり、経験値の違いをすごく感じております。

(澤委員) こういうことを学んだらいいんだよねっていうことを。

(生徒) 率先してやってくれるので、お手本になってくれます。

(澤委員) そういうところは、すごくいいところなのかなと思ひながら聞いてたところなんですけども実際そうなんですね。

(西山委員) では、一応皆さんの入学動機、それから、ここのところが悪いところというお話を伺いました。これからは、改革について議論していきたいと思います。まず、入試制度が大きく変わりましたよね。それで、資料の入試改善実施状況がありますけど、この入試制度の改革については、生徒さんはどういうふうに受け止めておられるのかなというのがまず聞きたいところです。一般入試をやめて、要するに筆記試験を廃止し、そして推薦入試が大幅に増えた訳なんですけれども、市立高校推薦も今度入ってくるということで、こうなると、千原台高校や必由館高校には非常に有利になるんですけど、一方で、それ以外の高校の生徒さんたちは、何これと思うかもしれないと思うところもあるので、生徒さんたちはどう思ってるのか伺いたいと思います。太田さんどうですか。

(生徒) 僕は割と賛成してる方で、推薦自体の内容が増えたっていうのは、結局、推薦と言えど枠が増えて有利になるのは間違いないんですけども、そこはそこで競争があるので、どちらかと言うとその試験の内容に、プレゼンテーションを追加したのがとてもいいと思っている。社会人になって発表する機会とかすごくあるっていうのが基本ではあるんですけど、実際にそのプレゼンテーションができるかどうかによるだけではないんですけども、人前で話すことに対してどれだけ素質があるかっていうのを試験内容の一つとして見定めることができると思うので僕は割と賛成している方です。

(西山委員) わかりました。筆記試験を廃止したことで、学力が足りなくなるんじゃないかとかいうそういう心配は、ありませんか。

(生徒) そうですね、うちの専門学校のコンセプトとして大事にしてるのが、入った後にどれだけ成長できるかというのがあります。入試の難易度は、もちろん大事なんですけれども、一緒にレベルアップしていくっていうのが大事だと思うので、学力に関しては、問題ないんじゃないかなと思っております。

(西山委員) ありがとうございます。藤本さん、あなたは社会人経験者ということで社会人入試が新設されたことについてはどう思いますか。

(生徒) 正直なところ、社会人入試を使って入ってくる人がいるだろうかと思います。というのが、社会人に対しては職業訓練や、働きながら仕事を失った後も学べる環境というのが十分、労働局とかで整備されてます。私が入った目的は、そもそも専門学校卒の学歴が欲しいというのがあったので、そこで社会人に対してうちに入学することのメリットそれからデメリットもあると思うので、その両方を整備していくことが必要なのかなという風には思っています。

(西山委員) その他の入試改革についてはどう思います。

(生徒) 市立高校ということで市立の2校から生徒が志望してくる。非常に、面白い制度だなと思います。それと同時に、ほかの県内外の高校から入ってくる希望者に対しても学校の魅力が伝わるような機会を説明会とかもっと増やして、うちの学校の魅力をアピールしていけたらなというのは思います。

(西山委員) ありがとうございます。宮下さん、いかがでしょうか。

(生徒) 私はいくつか思うところがありまして。令和3年度入試は筆記試験を廃止して、面接だけの形になり、グラフのとおり、急激に入学者が増えた。ここは、筆記試験がないなら受けてみようかなという、入試に対して前向きな、取組ができるかなと思ったんですけど、新しくなる入試では、プレゼンテーションがあるので、そこが高校生の人たちはちょっとハードルが高くなってしまふかなと懸念しております。

(西山委員) なるほど、太田さんとは反対の意見ですね。ハードルが高くなる。

(生徒) 今は就職活動でも、エントリームービーや、プレゼンテーションといった形があるので、必

要なスキルだと思うんですけど、高校生に求めるのはまだ早いような気がします。市立高校推薦は、僕は県立の市外の高校の出身なので、市立の学校だから仕方のないところはあるかと思うんですけど抵抗感があります。推薦の数を減らしてみてもいいのかなと思います。

(西山委員) ありがとうございます。入試改革について学校側から何かコメントはございますか。

(教 頭) それぞれに意見がありますので、良い面、悪い面を踏まえて入試に取り組んでいきたいと思えます。プレゼンの方が、まったく見えないというご意見はもちろんあるんですけど、面接で十分に自分を発揮できない学生さんに対して、作り上げたプレゼン・動画を代わりに使うというのは作り直しは何回でもできますので、そこで自分の力を発揮できるという可能性もあるかなと思います。市立高校推薦については、市立高校の2校だけ別枠で去年も指定校ではしていたところなんですけど、本校は市立の学校です。市立の高校との連携ということで今後はしっかりと打ち出していく必要はあります。あとは、希望で送り出していただければ一番いいかなと思いますけど、まだそこは見通しが見えていないところです。

(西山委員) 何かご意見ありますか。

(生 徒) ちょっとしたことなんですけど、市立高校の千原台・必由館でうちの情報のクラスの大半がその高校の出身が多くて、県内全域で見ても、学校の知名度が高校生には低いかなと。私は、大津高校出身ですが、学校のパンフレット欄にもなく、記憶になくて、自分で調べたから見つけられたんですけど。他の公立高校への宣伝というか知名度の向上というか。

(西山委員) 宣伝が、十分でない。

(生 徒) 本校として盛り上がっていくかなと。

(西山委員) 私が見るところ学費が安くて非常に魅力的でね、この学費でこれだけの教育を受けられるというのは、熊本市民にとっては大きなメリットだと思ってるんですよ。ただ、そういうことが、あまり理解されていない。周知されていないのは確かにおっしゃるようなところもあるかなと思います。澤委員、今までの話で何かありますか。

(澤委員) お尋ねしたいことが2つあります。校長先生が国内初の取組の学生推薦の新設は話題にならなかったと嘆いておられました。学生推薦の仕組みってどんな感じでされているのかというのが一つと、もう一つは、学生推薦は割合的にはどの位の割合なのかということをお尋ねしたいなと。

(教 頭) 学生推薦は、本校の1年生が同じ高校出身の高校3年生を推薦する。少なくとも半年うちで学んだ学生たちが、うちの学校はこういう風な動きがあるんだから、あなただったら学校に来て大丈夫じゃないというところでミスマッチを防ぐというのが、一番大きな目的で、そういう推薦制度をしています。ただ、本校に卒業生がおられないところは、使えませんので、あくまで在学生在が卒業した学校に限らせていただいている。昨年度のパンフレットにもありましたが、1名入っておられますけども、なかなかそこがちょっと難しいというのと、ハードルってところでちょっとやりようがわからないということで、実際にはお1人しか受験をされなかった。一応今年度も、ご案内をかけてますけど、なかなか高校の方も、出していいものなのかどうなのかというのがまだ。通常、推薦というのは、校長先生が推薦されるんですね。だから、校長が推薦していない者を推薦として扱っていくという、ただそこで、どうしても、評定平均で足りない学生たちでも、本当に意欲的に頑張りたいという学生たちがおるならば、ぜひ入っていただきたいということでそういう風な制度を設けています。推薦でなくても一般はあるんですけど、ぜひ入りたいという希望があるならばそういう風な推薦制度を使えるようにということで、一応多様な選択肢を表に出しています。

(澤委員) 通常は指定校推薦とか校長推薦の場合は大体評定が4.0以上とかですよ。

(教 頭) 評定平均を一応出させていただいています。募集要項の先ほどの資料、12ページ左側のページに指定校推薦については評定が4.0以上、校長推薦は3.6以上、ここにかからなかった学生で3.2以上から3.5ですね、そこまでの学生が推薦でエントリー出来ますよということで、推薦の試験の幅を広げています。ただちょっとこれですね数の方は、うちが定数が70人しかないので、あまりここを大きく出してしまいますと、そこにとらわれ過ぎてしまうという部分がありますのであくまで内々の数ということでございます。

(西山委員) 入試についてはこれぐらいでよろしいでしょうか。

(教職員) 今、高校の方を訪問させていただいているんですけど、入試の説明をしたところがとても素晴らしい取組だということで、入学させたいということを先生から聞いています。

(西山委員) そういう意味では宣伝が大事ということですね。

(教 頭) 宣伝は予算の問題もありますので、今、ホームページはもちろんですが、SNSで特にツイッターとインスタグラムの方はかなり頻度を高め、特にインスタグラムの方は、学生自治会も使って、事あるごとに載せるようにしています。それを見ていただいてこの前のオープンキャンパスもかなり来ていただいたかなと思っています。実は熊本県には、専各連という本県の専修学校各種学校連合会というのがございます。そこは私立の学校しか加入していません。ですからそこに入っている名簿の中にはうちは入らないんです。公立の専修専門学校です。農業大学校であるとか、あるいは、看護専門学校ですとか、そちらは看護・農業関係で特化してる部分がありますので、どうしてもちょっと今までうちは埋もれている部分がありますので、今、昨年もそうですけど先生方、校長先生などで学校訪問、夏休みにしてアピールをしながら、できれば学生推薦とかいろんな機会にうちの学校を知っていただければありがたいなということで、できるだけそういう風なインスタグラムやツイッターでSNSを中心に広報活動をやっているところです。

(西山委員) ありがとうございます。では入試関係はこれぐらいにして、次はキャリア創造学科について少しお話をいただきたい。35ページに、キャリア創造学科の四つのポイントというのがあるんですけど、まず、コース制をやめる理由が書いてあるんですけど、コース制については皆さんどう思われますか。今のコース制を維持した方が良かったのに、いやこんな風にした方が良かったなど、どういうご意見でしょう。太田さんお願いします。

(生 徒) 最初に昨年度からコース制を変えるみたいな話が出て、僕はあんまり賛成しなかった方なんですけれども、その理由があまり他の大学との差異がなくなると思って。集中して特化して勉強できるから、コース制の意味があるっていう風に今まで考えてたんですけど、でも最近ちょっと意見が変わって、集中させることも大事なんですけど、2年間にわたって学校に行くわけですので、自分に大事な科目はずっととって自分が本当にこれいるのかなとか、この授業大事なんだろうかなっていう授業を取捨選択できるので、無駄な選択をするんじゃなくて自分自身の未来に沿って少しずつプランを決めていけるっていう風になってたので、私は、これについては賛成してる方ですね今は。

(西山委員) わかりました。後で授業の質の問題は議論したいと思います。藤本さんお願いします。

(生 徒) 非常に面白い取組かなと思います。今は、情報コースの人が経理コースの授業をとれないという状況で、自分自身も経理の、例えば消費税とかそういった税法関係の授業を受けてみたいな面白そうだな、先生も面白そうだなと思うけれども、コースの関係で履修が出来ないとか、そういったところで、来年度から科目選択制になるということは個人のキャリアを考えていく、プランニングしていく上で非常にメリットになるのかなという風に思います。

(西山委員) ありがとうございます。宮下さんいかがでしょう。

(生徒) 私は賛成です。理由としましては、専門学校ですから行く行く進路的には全員が就職という形になりますので、この学校で培った友好関係等が、今後の人生で大きく続いていくものになるので、今は、私たちはこういう自治会として参加することで、太田君だったり、観光の水野さんであったり、他コースとの交流もあるんですけども、入ってない人はクラスの中だけで友好関係が終わるのでコース制を廃止することによっては学年全体で友達が増えたり、やっぱり関係性が広がればいいかなと思います。

(西山委員) ちょっと違う視点ですね。

(生徒) 藤本君もおっしゃったように、他コースの学びたいことが学べるので、そこは本当に個人個人特化した、良い所かなと思いました。

(西山委員) わかりました。皆さん賛成というということで安心しましたけど、ちょっと気になったのは、やはり太田さんが、2度に渡っておっしゃった、授業の質に差があるということということで、どういう風にこの授業改善をしていったらいいのかというのは、私も大学に勤務してたんですけど、大学でも常に問題になっている。これは学校側にお尋ねしたいんですが、大学では教員の授業の質を向上させるために様々な取組をしてるんですが、いわゆるファカルティ・ディベロップメントと言ってるんですけど授業の得意な先生の授業を参観したり、授業の評価を行ったりとか、アンケートを行ったりして改善に結びつけてもらうという。

(教頭) 授業評価について年に一回、年度末にしています。ここは前後期で開講している科目もありますので、前後期で評価していく必要があるかなと思います。本校の場合は、先ほど校長からありましたとおり常勤職員が9名それ以外の方々はほぼ非常勤の方で20名を超えます。週に1～2時間ということですので、実務家教員をはじめ専門性の高い方をお願いしています。実務家の方は授業の経験がないことで戸惑いがある部分があるので、ですから、教務も含めて常勤の方に簡単に聞ける伝統ができれば一番良いかなと思っています。ICT関係にも入ってくるのですが、タブレットをNTTとの連携で全職員、全学生をネットでつないでおり、この中にドコモさんなんですけどソフトがありまして、これは、要はトークルーム、チャットみたいな形で、今日のも、私の方でトークルームを作って連絡をしたりとか、そういった形の担任であったりクラスであったりそういったところでのやりとりで情報共有ができれば、一番良いのかなと思っています。なかなか質の改善というのは早々にはできないということもありまして、意見が出てきましたところで困っていることがないかどうか先生方も含めてまたお話ししていきます。

(西山委員) よく分かるんですけど、非常勤の先生にはなかなか言いづらいですよ。こちらは、来てくださいとお願いしてる立場の先生もいると思うので、そういう人に、「授業改善してください」とは学校側としてはなかなか言いにくいところがありますので、そこは何とか、工夫してもらって学生さんの満足のいくようにして頂きたいというのはございます。授業改善を進める上での課題というのが、議題で上がっているんですけども、これについてちょっとお話を伺いたいと思うんですが、ICTの活用はどの程度進んでいるのでしょうか。学生さんからの印象をまず、太田さんお願いします。

(生徒) 私たちは経理で使ってるんですけど、最近は特に前年度と比べて進歩したなあって思うのが、例えば、タブレットが支給されたことによって黒板を余り使わずに、資料が配布形式でデータとして送られてきて授業の見返しを、タブレットからできるので、自分から能動的に勉強しやすいのと復習の学習がしやすい。非常勤の先生の方なんですけれども、資料を作ってくださいって持ってきてくださるんですけども、簿記は復習が結構大事な科目なので、特に、ここが重要とかその授業の資料などがあると、おっしゃったことがずっと頭に入ってきて、

かなりその授業のシステムが改善されているというのと、あとホワイトボードや設備がその授業に関しては、少しずつ整ってきていて、資料だけにとらわれず、臨機応変に対応してくださるので、僕としては、ICT機器の活用は進んでるんじゃないかなと思います。

(西山委員) 復習が大事な科目で特に有効だと。藤本さんお願いします。

(生徒) 今、先生方と学生みんなにiPadが配られていて、日頃から例えば求人票が届きましたというのは全部先ほどのアプリで流れてきたり、就職説明会がありますとか、今度こんなイベントしますとか全部iPadを通して来るので、家でも見れるし学校でもできるし、非常に便利になったと思います。ただまだ、iPadを学習端末として活用できてない。そもそも活用する授業がほぼない。どうしてもパソコンがメインの授業になることが多いので、iPadでできることできないことってというのが分かれるとは思いますが。ペーパーレスとか非常に進んできた社会情勢ですから、こういったところでどんどん配信機器に対応していくというのは今後の社会人生活にとって非常に重要なことなのかなと思います。

(西山委員) ポジティブに考えているということですね。宮田さんいかがでしょうか。

(生徒) 藤本君と大体一緒です。求人票だったり、学校の案内といったプリントが、アプリで送られてくるのでなくしたりしないし、家でも確認できるので、それはすごく便利かなと思いました。授業面では、ドローンや、プログラミングで活用してるんですけど、局所的というか、使う機会が限られているなどという印象はあります。なのでもうちょっと授業や学習面で、使う機会が増やせればICTを活用していると言えるのではないかと思います。

(西山委員) ありがとうございます。その他、授業改善を進める上での課題ということで皆さんが感じていること。例えばこういう分野の、もうちょっと専門的な知識のある先生に来てもらいたいとかですね。何かそうしたことがもしあれば教えて下さい。太田さん。

(生徒) 授業に関する改善に関して、特に言いたいのが簿記とか会計メインの勉強となると、あくまで教科書上とか暗記させるというのは、意外と誰でも教えられるんですが、業務に携わってる簿記というのは、外部で事業を行ってる人じゃないと、どこが特に大事なのかとか、理論的な考え方を持つての方がいらっしやなくて、だから僕としては、実際に事業経験とか経理についてたことがあって、理論的に簿記を学習してる方々に来てほしい。授業に関しては、特に感じているのは生徒側に能動的にさせるような授業を増やして欲しいと思っている。聴くだけの授業では成長しないし、受動的じゃなくて、学校のコンセプトでもあるように、自分たち自身が挑戦していくというのが大事だと思いますので、自分自身で考えて行動して、どんどん勉強して成長していくというような、いいループが作れるような授業が望みですね。

(西山委員) いわゆる双方向型授業とかですね。アクティブラーニングとかそういうのを増やしてほしい。受け身の授業は嫌だ。よくわかりました。藤本さんいかがですか。

(生徒) 今の授業は、例えば、この資格を合格するために授業しますみたいな感じで、絶対に受からせるための授業をしてるかと言われたらそうじゃない。専門学校ですし専門課程で決められたカリキュラムですから合格させるための授業というのはなかなか難しいところがあるかなと思いますけど、せっかく資格を取るために勉強している学生たちも大勢いますので、受からせる授業をして頂きたいなと思います。

(西山委員) ちょっとよく分からないんだけど、何が足りないと思いますか。

(生徒) 今まで、テキストをそのまま読んで終わりなんですけど、例えば、その資格では、ここが重点的に出題されるからここを重点的にしておきましょう。

(西山委員) 実践的な部分を深めて欲しい。要するに、資格の受験対策ですね。わかりました。宮下さんお願いします。

(生徒) さっき藤本君のおっしゃったことと重なるんですけど情報コースではITパスポートの取得を目標として、それを売りにしてると思うんですけど、合格率が低いかなと。2年生でも、学習を進めているんですけど授業風景見てもやっぱり、先ほど、藤本君がおっしゃった様に学生に問題を解かせるばかりで、もうちょっとポイントを押さえたりだとか、必要なことを教え切れているのかなと、疑問に思います。もう少し、踏み込んだ授業をして欲しいなという。個人的にはプログラミングにもうちょっと力を入れて欲しいなと。入学した当時は情報ビジネスということで、期待してたんですけど、入学してみたら、意外とこんなもんだっていうギャップがあったので、もう少しプログラミング系を。

(西山委員) 今プログラミングは、パイソンですかCですか。

(生徒) パイソンとマイクロビットで、Javaはやっていない。

(西山委員) Javaと書いてあったけど。

(生徒) マイクロビットがJavaスクリプトだと思うんですけど。

(西山委員) もう少しプログラミングを充実して欲しいということですね。

(生徒) 例えばホームページを作らせたりとか。そういった、実践的な授業があれば、学習できるかなと思います。

(西山委員) ありがとうございます。澤委員ここまで何かございますか。

(澤委員) 授業の先生方のスキル、外部から来られる方が教授法について詳しく学ばれたことがないということで、仕方がない部分もあるのかもしれませんが。そのようなことを言いにくいという話もでていましたが、悪いとこを言うのは言いにくいですね。こういうことが良かったというのを言うことは言いやすいですよ。だからそういったことを、何か共有できるようなですね、簿記がとか、なんかの教科がとかいうと、その先生、誰の授業というのが分かってしまうんですけど、そうではなくて、こういう教え方をされた時良かったとか、実践に合わせたものがよかったとか、そういうのをどんどん上げていくような、タブレットを使ってチャットで、先生方もしっかりそれを見て頂くようなものもあっていいのかな。ピアという、仲間、同僚といいますか。ピアサポート的なことがそこで出来ていくと、それが先生方にも見れるような状況にあればいいかもしれません。大抵要望というのは、どっちかっていうとマイナス面のところをどうにかして欲しいとなるんですけど、そっちじゃないところの方法でやっていくというのも一つあるのではないかと。ちょっと戻るんですけど、私はプレゼンは凄くいいと思います。今、小中学校では全員iPad持っているわけですよ。その中で熊本市は創造的なものに使うという授業改善を行っていますので、その流れで子ども達はこれからやってきますので、そしてまた将来、就職するときはそういった力が求められますからそういったことに活用して自分を表現する、VUCAの時代と言いますが先の見えない時代に自分たちがキャリアをどのように持っていけばいいのかというところに繋げていかれたらいいのかなと思います。

(西山委員) プレゼンは、確かに重要なスキルだと私も思うんですけど、高校生に入学時点でそれを求めるかというところに、そういう意見が出る。それは確かにそうかもしれないなと。

(澤委員) 高校自体がそういう授業をやってないですね。やっぱり入試のための授業。どうしても高校になるとそうになってしまう。それにも問題もあるのかなと。

(西山委員) おっしゃるように出る時にプレゼン能力がついていれば、一番いいわけで。何か言いたいことはありますか。

(生徒) 私は高校の頃にちょっとプレゼンとか、中学校の頃にもパワーポイントを使っていて、なので多分自分が試験になったとき、そんなに難しくないだろうと思っているんですけど、でも、

特に思ったのが、先ほど、VUCAの時代とおっしゃられましたけども、僕もそう思って、今の時代でも、社会の情勢とか見ても分かるんですけども、受け身でいちゃ駄目っていう風に思っていた。だから、何か新しいことを創造する人とか、もっと挑戦する人が増えないといけないと思う。一番思うのが、もっとそういう風に主体的に行動する人っていうのを、自分たちの学校で集みたいので、プレゼンは確かに高校生からしたら、情報とか、勉強してないと難しいといったところはあるかもしれないんですけど、不可能ではないので、是非、やる気があってその情報とかの力をつけて、自分なりに頑張りたいという生徒さんに入学して欲しいなら、いいのかなあと思います。すみません自分の意見で。

(西山委員) 大事な意見だと思います。今の意見と関連して、次の話題に入りたいと思います。起業家教育というのを、キャリア創造学科があるんですけど、これについてどう思われますか。なぜ起業家教育なのかということを一応説明してありますが、学生さんから見た時にどういう印象を起業家教育ということについてお持ちになっておられるか、教えてください。太田さんいかがでしょうか。

(生徒) 僕としては、起業家教育を実践して教えるっていうのは、すごくいいことだと思って、先ほども言ったんですけど、自分から挑戦して動けるような人材じゃないと厳しい社会になってきてるっていう面もあります、というのもあるんですけど、一応、学校の方では言ってるんですけど、起業家教育を教えると言っても、起業しなさいというわけじゃないんです。だからその教育理念を持つというのはいいことだと思うんですよね。特に教えた方がいいんじゃないかなって思うのが、最初の設立と、軌道に乗ることです。だからその人材確保のノウハウとかすごい難しいんですけど、とか、起業した時に、どう成功するかみたいな、どうやったら軌道に乗るか、現実的に考えるような、ちょっとシリアスだけども現実を見た内容の授業などをやればいいんじゃないかなあと思います。

(西山委員) 本校の卒業生で起業しておられる方もいらっしゃるのでもそういう方に来て話をしてもらえる機会があるといいと思います。ありがとうございます。藤本くんどうぞ。

(生徒) 自分で動ける自分で考える人材になりましようっていう教育だと思うんですけど。実際にいろんな会社を起こした人だけじゃなくて、会社で働いている人とかそういった人たちの話を聞いて自分が将来どんな社会でどんな人材になりたいのか。自分が今いる学校で、その動きを自分で考えられる人材になるためにはどういうことを勉強すればいいのかっていう教育ができるのは非常にメリットかなと思ってます。この前、熊本駅前のクロスポイントに先生方と見学に行って、非常に面白かったです。やはり、ああいったところに行ってみないと実際に得られる経験もないでしょうから。会社を起こすっていうわけではないです。自分で動ける人材づくりというのが非常に大事なかなと思ってます。

(西山委員) 起業家教育はいい方向性だということですね。宮下さんどうぞ。

(生徒) 私も凄くいいと思います。起業家教育で培われる思考、価値観といったものはやっぱり将来人間としても必要なものではあるかなと思うので、それを、先生方から教えていただくのはありがたいことかな。

(西山委員) わかりました。ありがとうございます。もう残り5分しかなくなりましたけれども、最後に、学生自治会について、お伺いしたいと思います。今、自治会に入ってるのは、そちらの2人ですか。

(生徒) 3人です。

(西山委員) 学生自治会が非常に主体的に動いてるという話はあったんですけど、それぞれ皆さん参加して、どんな考えを持っておられるかお伺いしたい。太田さんどうぞ。



(生徒) 僕は一応、上の方の立場であるんですけどでも、どっちかというと僕よりも皆さんの方がいっぱい行動してくださっています。すごくやりがいがあって助けていただいているなっていう面があるんですけども、今はそんな感じなんですけど、少し不安なのが2年後3年後これが続くかというのが、ちょっと不安です。でも、すごく良い取組だと思うので、もっと主体的な学生を増やすためには、どうすればいいかというのを少し考えた方がいいんじゃないかという部分は少しあります。それ以外も不安は全くなくて、すごくいい組織だと思います。

(西山委員) でも、将来のことを心配してるけど、今出来たんだから、続けるのは簡単じゃないかな。

(生徒) そうですね、続いたらそれがもう最高だと思います。

(西山委員) ありがとうございます。藤本さんどうぞ。

(生徒) 私は福利厚生を担当してるので、今、弁当販売とか崇城大学のレストランと連携しているところです。それから資格というのは客観的評価の一つですから、学生にはどんどんチャレンジしてもらいたいと言うところで金銭的な支援をこの前しましたし、これから学生たちがどんどん自分で動いて学んでいけるような環境づくりも学生自治会としても目指しているところです。これから、1年生もどんどんメンバーに入ってますのでこれからいい流れで、卒業してからも続くといいと思ってます。

(西山委員) ありがとうございます。最後に宮下さんどうぞ。

(生徒) 自治会のいいところは、やりたいことができるということです。お祭り事とかイベントとかそういうのが好きなので、そういうのを企画したり、それを中心的になって動けるのはすごく楽しいです。これ、立ち上げたのが会長の三角君で、僕はそれに誘われて入った形なんですけど、なかなかないような機会ができてるので、それがすごく入ってよかったなと思っています。心配事って言ったのは、2人が言ったように存続。1年生が入ってくれないので、続いていけるのかなと、不安に思っています。

(西山委員) 藤本君は1年生が入ってるってませんでしたか。

(生徒) 人として入ってきますけど、私たち並みにアクティブに参加している人が少ないので。

(西山委員) そうなんですね。

(生徒) オープンキャンパスとかも1年生が参加してるのが少ないので、来年から、同じようにできるのかっていうのが心配です。今まで自治会に入るメリットなど厚かましいですけど設けてもらったりして自治会が続くような制度を今後作っていったらいいなとは思っています。

(西山委員) どうもありがとうございます。これで終わりたいと思います。今日は貴重なご意見をありがとうございました。

## Cグループ（小屋松委員・出川委員）

（小屋松委員）皆さん改めましてこんにちは。約1時間の短い時間ですけど、できるだけ、皆さんのいろいろな意見を聞かせていただきたいと思っていますので、よろしく願いいたします。まずは、最初に、発表者の方を一人決めておきたいと思います。できれば生徒さんからということです。

（生徒）じゃあ、やります。

（小屋松委員）水野さんにCグループの発表者になっていただきますので、よろしく願いいたします。まず簡単に自己紹介をしていきたいと思いますが、私、教育委員の小屋松と申します。仕事は司法書士事務所、少ない人数ですけども、約10名で仕事をやっており、一人一人の力量が問われるという商売でございますので、今日は皆さんがどういう気持ちでここで勉強されているのか、その辺を聞いていきたいなと思います。よろしく願いいたします。

（出川委員）教育委員をしております出川です。いつもは熊本学園大学で、児童福祉を教えています。今日は初めて皆さんの御意見をお伺いします。楽しみにしていますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

（教員）総合ビジネス専門学校で総務部学生自治会を担当しております池田と申します。本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

（生徒）学生委員会の栗山です。緊張してます。よろしくお願い申し上げます。

（生徒）2年情報ビジネスコースで企画委員長を務めております朝熊七彩と申します。よろしくお願い申し上げます。

（生徒）観光サービスコース2年の水野と申します。本日はどうぞよろしくお願い申し上げます。

（教員）専門学校で就職支援アドバイザーをしております津志田と申します。学校改革の会議に出るのは初めてで、不慣れなところもあるかもしれませんが、よろしくお願い申し上げます。

（教員）総合ビジネス専門学校の事務長をしております池元と申します。本校2年目になります。ちょうどいいタイミングで、学校改革に携わらせていただいております。ありがとうございます。どうぞよろしくお願い申し上げます。

（小屋松委員）早速、意見交換に入ります。今日は三つテーマが設けてありまして、授業改善を進める上での課題、それから学生自治会、今後の生徒の取組、そして起業家教育のこれから、という風になっています。ちょっと順番を入れ替えまして、今回の1番この改革の目玉といいますか、やはりこのコースを無くして、キャリア創造学科をつくったという、ここが1番大きな改革になるかなと思います。これについては、来年からになってきますので、現役の生徒さんは、これを経験することは無いわけですが、率直に、今のご自分たちのコースの授業について、こうやったらいいなという点があったらそういったことも一緒に伝えていただいて、もしこのキャリア創造学科について、知識があたりであれば、それも踏まえて意見を聞かせてもらえればと思います。栗山さんから。

（生徒）自分が好きな授業を選べるという点ではいい改革だと思います。今、クラスでやってますが、医療事務関係とか自分は別に要らないかなと思ったりして、自分が受けたい授業を受けたい。

（小屋松委員）今、栗山さんが所属しているコースでいくと当然そのコースの中には学科も入っているけど、これは自分としてはいらぬかなというのはあるけど、受けざるを得ないという状況があると。

(生徒) そうですね、あります。

(生徒) 私も栗山君と一緒に、やはり情報ビジネスで、情報のことについて学びたかったんですけど、その中に簿記とか、自分が就きたい職業に対してちょっと関係ない授業とかもあったので、その点では、一から自分の将来を考えながら、教科を選べるってのはすごいいいなって思いました。だけど、同じ情報の中でもまだ目標が決まってない子とかもいたりする中で、自分で選択して教科を選べと言われたときに、やっぱり、これから入ってくる方々は難しいのかな。決まっていれば、自分で好きなように選べるかもしれないですけど、決まってない人からすると難しいし、学んでいく中でちょっと違ったなって思う人とかも出てくると思うので、その点では、どうなのかなとは思いますが。

(小笠原委員) そうですね。高校を卒業してここに入る時に、自分はもうこういうことで将来やりたいんだ、だからここでこれを学んだということを明確に持っていれば良いんだけど、そうではなくて、入ってから考えようという方は当然、いらっしゃるわけで、そういう方にとっては、今後の学科をこういう風になったというのはどういうことだろうかと懸念というか心配を感じたりしているということですね。水野さんどうぞ。

(生徒) 私は今観光サービスコースに所属していて、自分自身、ホテルに就職したくて、こちらの学校のコースを選んで入学しました。その中で私は簿記をとってみたいと思っていたんですけども、やはり簿記が観光サービスコースの中で受講する授業の中に入っていないくて、ちょっとそこで、取りたかったなという思いがあった。来年からの改革で、自分のとりたい授業を自由にとれるというのは、すごく自分の将来の選択が広がるというか、すごく有意義な時間、学校生活を送っていけるのかなと思います。やはり、さっき朝熊さんがおっしゃった、まだ将来が決まってない人とかも、やっぱりある程度、何人かはいらっしゃると思います。今までの敷かれたレールを行くよりは、少しでも自分の興味がある授業をとっていった方が自分の将来のためにもなるのかなと思うので、来年からの選択制の授業というのはすごく有意義な時間になると思います。

(小笠原委員) 皆さん、共通して自分で授業を選びたい一方で心配もある。今、生徒さんたちの話を聞きましたけれども、先生方からは、これから新しく変わっていく、その辺について何か感想でも構いませんのでごさいませんか。池田さんからお願いします。

(教員) 私は、授業する側としましては、生徒の意欲が高揚するのは非常に好ましいことなのかなと。授業する側として、あまりにモチベーションが低いのは、ただ、できるだけ多くのことを知っていただきたいというのがあります。そういったところで、やはり興味がある授業を選びたい一方で、朝熊さんも言われましたように、目標がないなかで、いろいろ経験したいということで入られる生徒さんも当然いらっしゃると思います。そういった方たちにとっても、いろんな授業が選べるってというのはすごくいいのかなと思います。

(教員) 就職のアドバイスをする上で、確かに学生の皆さん、自分が行きたいところの必要な科目が選べるってというのは非常に有利に運ぶのではないかなと思う反面、起業家精神を全面に出して、起業家教育を支援するような形になりますので、企業がその辺をどういう風に受け取られるのか、はっきり言って不安な面もあります。今、副業とか、社会が、そっちに向かっていっているんですけども、企業としては、本当は自分のところで働いてもらう人材を募集しているので、ゆくゆくは起業のためにここに入ったのかなと、言い方は悪いんですけども腰掛、ずっとうちの企業に居てくれるのかなというような不安がひよっとしたら、出てくるのかなというのもあり、そこまで受け止められるのかなという不安もあります。もう一つ、起業家を育成するという学校に来た学生に対して、今まで就職の支援をしていたんですけど、私は卒

業したら起業しますという時のアドバイスを上手くできるのかなという不安もあります。

(小屋松委員) 今おっしゃったケースでいくと確かに起業家精神だから、しっかりこれを身につけてということになってきた、そういう学生さんが、そのうちに入ってくるという、今おっしゃったような御心配というか、確かにあるかもしれませんね。ずっと居てくれるのかな、途中で辞めていくのかなという。でも、そこは逆に、企業側が少し変わらないといけないところでもあるかなと思う。その人の、キャリアアップを考えていけば、自分のところの職場でできる範囲、ここにとどめていいのかという、そういったことも逆に経営者としては考えていかないといけないなと思います。そういう方々が、起業を別にしなくてもここで培った、そういった精神を生かす道は、企業の中でもあるわけですよ。そういったものをどれだけ引き出せるか。企業側の体制の問題っていうか、これも一緒に考えていかないといけないかなと思う。ここでもその起業家を育てるというより起業家精神を養うというか、そういったことからすると、絶対企業に必要な社員さんの素養なんですよ。だから、そう考えれば、今の皆さんの御心配も、あると思いますが、でも私は逆に企業側が、もう一步超えていかないといけないという、そういう気がしました。

(教員) どっちで企業側がとらえられるかですね。

(小屋松委員) そうですね。

(教員) そういうふうな学生は、良いと捉えられる企業もあれば、そうではない場合もあるかもしれない。就職支援の仕方、企業さんはどうとられるのかなというところで。

(小屋松委員) 我々の会社に入ってくる人たちを見ても、指示待ちということが結構言われますけども、そういう方って多いんですよ。自分から何か工夫してやっていこうというか、言われたことはやりますけど、それ以上のことは、あまりやらない。そういうところがちょっとあったりするから、そこら辺はこの起業家精神というか、そういうことで随分変わってくるかなという風に期待をしているわけです。それともう一つは、企業をすぐやめて起業するというものに、アドバイザーという立場から、難しいなとおっしゃいますけれども。確かに私も、これは難しいと思いますし、卒業してすぐ起業すると言ったって、いろんな資金面とか、準備がいりますので、こういった環境が全く整っていないところで、そういう話をして、私は難しいと思うんですね。何年間かのキャリアを積んだ後にという風に考えていかないと、そこら辺をこの2年間で学んで、すぐ起業というのはちょっと、どうも無責任な感じがしたりしますが、そういった人たちの環境も逆に言ったら整えていかないといけないというか、それは行政のある面、こういうことを、やり出した以上は、そういったこともサポートできるような行政の体制というか、そういったことも考えていく必要があるのかなと思います。資金面のこととか、そういった手当てをどうやっていくかということに当然直面します。

(教員) 実はもう、今年それを見据えてこうやって新しく変わったり、起業家精神を持つためにはということで、それを目指した教育活動を行っている。起業をされている方の様子を森都心プラザやびぶれすに何回も行って話を聞いたりとか、そういった繋がりを生かしながら、来年度以降も更に変わっていく必要があるのかなと思っています。起業家の話を最初に聞いたときはどうなるか心配だったが「自ら考え、自ら行動する力」というのは学校だけではなく、熊本市全体の基本的な精神であると思うので、熊本市の教育目標の一つに沿った形で、起業家マインドを持った学生を育てていくということで、好きな科目を選択できるということで、来年度から特にそこがネックになってくると思うが、昨年予算要求の時にどの科目にどのくらい希望者が殺到するのか全く予測不可能なので、説明に非常に苦労した。今年度パソコン室を大きく改修する予定で、基本新しい教育課程では学生の希望を叶えられるようにするが、

どうしても調整が困難な場合も出てくる。その際に、生徒にどのような希望があり、目標を立てているから受けたのかとか、そういったところで調整をしながら、一つの科目で受けられる人数は決まっているので、その中に納まるような工夫をやっていかないといけない。場合によっては、2回同じ授業をすとか、そういった工夫をやっていながら、一方で、広さも時間も限られているので、どのくらいの中身をどう組み立てていくのかというのが、今年度もだが、来年度も大きな課題になっていくので考えていかないといけない。

(小屋松委員) 何か(1)の方も入っていますが、もう少し(3)にこだわっていきましょうか。ここに、キャリア創造学科の四つのポイントと書いてあって、この起業家教育を柱とする、学生の皆さんからも話聞いてみて、いろんな自分が学びたい身につけたい科目を選べるというのは非常に今回のこの改革の中で大きな目玉だったし、それはいいことだという風に、好意的に皆さん受け取っていらっしゃるなという気がしたのですが、一方で、先生もおっしゃったように、そこに殺到してしまうといった時はどうするのかという、そこら辺は非常に難しい問題なのかなと思います。例えば皆さん方、入学してまず共通科目ってあると思うのですがそれ以外に今度は選択科目が、自分はこれとこれを選びたいという、朝熊さんもおっしゃったけど入ってそれが明確に、選択できるような状況にあればいいけど、今から考えていきますという人たちにとっては非常にハードルが高いと思うんですね。選択するという、そこについて学生さんたちは後輩に対するアドバイスでも構いませんけど、どのようにしていったらいいと思いますか。

(生徒) 今は3コース、情報ビジネスと、観光サービス、それと経理がありますけど、その表から選択科目に薄くばらまかれていて、入って選択科目を選ぶという人には、オープンキャンパスの時にも言ったんですけど、今いる各コースの学生が、例えばこういう仕事に就きたい時にはこういう資格を取ったり、どこを目指せばいいよというのを、ある程度見える形にしておいて、それを入学する人たちが目安に授業をとれば、こういう道にも進めるし、資格も取れるよということを示すことでちょっと自分の先が見えてくるのかなと思います。

(小屋松委員) 今のオープンキャンパスと言うのは、今年初めてされたんですか。

(生徒) いえ、オープンキャンパスは毎年やっています。学生主体でやったのは今年が初めてです。

(小屋松委員) 何人くらいオープンキャンパスに高校生が来てくれたんですか。

(生徒) 100名くらい。

(小屋松委員) 定員オーバーですね。でも今水野さんがおっしゃったように、この学校のことを知らなくて来る人たちは、事前にそういう機会を設けて、そこである程度準備ができるというのは、入ってからの先ほど言われたような懸念も少しは解消されると思うので、非常に大事な取り組みになってくると思います。ガイダンス資料というかオープンキャンパスである程度入る前に準備してもらうという、そういうのは必要な気がしますね。他に何かございませんか。

(生徒) 私自身、この学校に入学したのが、オープンキャンパスにも行ったことがなく、学校のホームページを見て、そこで志望動機考えて受けたみたいな感じで、何をするかって本当にわからなかったんです、入学するまで。オープンキャンパスにきて、ちょっと明確になって、授業を選ぶ人からしたら楽っていうか、イメージはつけやすいかもしれないんですけど、私みたいに実際にオープンキャンパスに来たこともなくて、入学してから選ぶという人は来年度もいると思うし、そういう人には難しいのかなと思う。なので、個人的には、最初の1週間とか、仮の体験入部みたいな形をつくって、少しイメージを作って選んでいくっていうのもありなのかなと。私自身、ここに入る前に大学に行っていて、やめて来ました。大学は基本的に選ぶことが多いと思うのですが、私が大学に入学した時にちょうどコロナが始まって、本当に誰

も教えてくれない状況だったので、やはり不安があったし、目標は決まっていたんですけど、それに向かってどういう資格を取っていくかというのも、先輩とか学校の先生方からは何も言われずに1人で決めるみたいな形で、それはちょっと、ここに来て、選ぶみたいな子たちにはお勧めしないというか、そうしない方が入学してからのミスマッチを防げるのかなと思います。

(小屋松委員) オリエンテーションじゃないけど、この学校のいろんなことを知る機会を1週間ぐらい作って、そういう時間を費やしても、そこで明確になって後の授業をしっかりとった方が、本当に効率的です。そう考えれば今おっしゃっている、入学してからアンケートをする、そういう時間をつくって、そこで選択肢がいろいろあるんだよってことを伝えてもらうような機会というのをつくってほしい。大事なことだと思います。他に栗山さん何かあります。

(生徒) 事前に授業内容を知れた方がいいと思います。何するのかわからないまま選んでも、ありえなかったな、とか意味なかったなとなったらどうしようもないので。

(小屋松委員) 選んでみて失敗だったのはまあ経験ですよ。何もかも上手くいくはずはないから、そこでまた軌道修正していくような機会があればいいかなと思います。いずれにしてもコース制がなくなって、自由に選べるのはすごく可能性を感じますね。恐らく、今後この学校に入ってくる学生さんというのは相当意識の高い人たちが入ってくる可能性を感じるんですけど、ここでこれを学ぶんだみたいな、何かそういう気がして非常に楽しみですけれど、受ける学校側としてはどうでしょうか。もう一言ずつ。

(教員) なかなか目標というものは明確ではない。何を勉強していったらいいのか、自分は将来何になりたいのか、そこまで全然頭には入らないけれど進学はしたい。幅広く学べるのは魅力ではあるのかと、高校生を見て来て、また本校にきて思う。

(小屋松委員) 今の流れは、取りあえず高校卒業したら大学行くかみたいな。何になるかわからんけども、取りあえず大学行って、そこで考えようみたいにして遊ぶんですよ。そういう時間にならないように、ここは多分そういう風になっていかない気がするんですよ。だってもうビジネス専門で、自分に身に付けるわけだから、その取りあえずっていうのはどんどん減っていくような気がするんですけど、でもまだ今先生おっしゃったように、明確になっていない人が圧倒的にいるわけですね。そういう人たちが、ここで、自分で掴んでいくというか、そういう場所になればいいなと。もう一言、今の件に関連してありませんか。

(教員) 大学みたいな選択は、やる気のある子は物すごくやる気を起こす。おっしゃったように、取りあえずの手段として、この中で考えるかというような学生もひょっとしたら出てくるのではなかろうかと、そこはちょっと考えます。やる気のある子たちは、物すごく何かバンバンやっていくような期待というのは持てる気がします。

(小屋松委員) さっき水野さんもちょっと言っていたように、このコースに入っているけど本当はあれもやりたいんだよなっていうときにその選択がなかったというのがあるわけで、やっぱり、やっていく中で、そういうのに気づいてという、ここが非常にこの特徴かなと思うし、そういう人たちが、いっぱい出てきてほしいなと思う。今の取りあえずの学生さんが、何かこう、学校の雰囲気の中で、作って行ってほしいなと。

(教員) とは言え、公立なので。

(小屋松委員) でも最終的にはいろんな資格をとれるじゃないですか、2年間いた証が。この資格という、それは大きいですよ。そこを目指していこうというそこだけは確かに明確な、目標になっていると思うから、そこを目指すだけでも、この学校に来る価値は十分あるかなと思うんですね。資格を取ってから先のことがもっと重要なんですけど、取りあえずそこまで学生さん

が目標が明確になりやすいならこの学校の特徴でもあるなと思います。池元さんどうぞ。

(教 員) 学生募集にかなり力を入れています。数年前まで入学者数がかなり少ない時期があったのと、入ってからやめてしまう学生さんもかなり多くいらっしゃったんですね。ミスマッチというのが明らかだったので、うちの学校はこういう学校ですというのを、学生募集の時に詳しくお伝えしてうちの学校の目標にあった学生さんに来てもらいたい、そのことによって退学者数も一昨年に比べるとだいぶ減った。定員70人とかなり少ない人数なので、少数精鋭で目的意識の高い70人を受け入れると、意識の高い学生さんに教育効果を与えていく、学生募集は全ての職員が県内あちこちに行って詳しい説明をしている。興味を持っていただいた学校からお尋ねがあれば、それをお返していますし、全体の説明会も学校向け1回、オープンキャンパスが4回だったんですけど、個別説明会をご希望の時には必ずするようにしているので、そこで個別に対応してうちの学校はこういう学校でお伝えしているところです。

(小屋松委員) キャリア創造学科の四つのポイントもそうですし、教育方針もそうですけど、これをどんどんどんどん、伝えていければ、私はもう、向こうから来るんじゃないかなと思っています。来てくださいよりも、うちはこういう学校ですと伝えていくということで、十分な宣伝効果があるような気がします。

(教 員) あれもやりたい、これもやりたいけど、取れないという意欲の高い学生さんが増えてくれることを期待しています。楽な方に楽な方に進んでいく大学生も多くいらっしゃるんですけど、限られている中でどうやるか。

(小屋松委員) コースから選択制のキャリア創造学科がつくられたと。本当に、皆さんとても好意的に捉えていらっしゃると思いますし、是非これは、今後、この学校が大いに発展する、そういう何か可能性も十分感じられて、私たちも期待しております。ここで一つ目の起業家教育のこれからということについては一旦終わらしまして、学生自治会のことに移ります。これは、当然今まであるにはあったけれど、どっちかという、学校側から言われることを受けてやるみたいな立場だったのが、そうではなくて、自治会として自分たちの考えていることを、自分たちがこう改革したいということをどんどん発信していくという、組織としてこれがつくられた。これ学生さんにとってはどう受け止めてらっしゃいますか。

(生 徒) そうですね。私も今、学生自治会に入って学校の運営に携わらせてもらって先生方に指導していただくのではなくて自分たちで動かすということによって、自分たちで学校をつくっているんだなという意識も高まって、すごく、自分たちでつくっているという気持ちが増えてくると思います。なので今後の、来年の自治会の方たちも、今、1年生、2年生の自治会の生徒が、引継ぎというか、教えていったりしているし、学生自治会の活動も活発になるようにという動きをしているので、これから年を重ねていくにつれて、もっと学生の意見が、たくさん飛び交うような学校になっていったら、すごくいいだろうなと思います。

(小屋松委員) 今自治会の構成メンバーっていうのは何人ぐらいですか、

(生 徒) 基本的には全員で考えるようにはしているんですけど、主に動くメンバーは決まっていて、情報の5人でちょっと考えてから、周りに助けを求めるみたいな形で動いています。大体1年生、2年生合わせて30人いないくらいのメンバーで運営をするようには心がけています。

(小屋松委員) これは1年生と2年生をごちゃまぜでやるんですか、それとも今は2年生からやっているんですか。

(生 徒) 基本的には2年生主導で動かしているんですけども、動かす時に、例えば先日のオープンキャンパスだったりとかは、1年生の子たちが来て後ろで見えてもらって来年に生かそうかなというのはあります。

(小屋松委員) 結構多い人数の中でも、その中でいわゆる執行部というか、実際動かしていく人たちがいるんですね。これ会合なんかどれぐらいの頻度でやっているんですか。必要に応じてですか。

(生徒) オープンキャンパスだったら、7月夏休みに入ってから、今度こういうことやるので手伝ってくださいみたいな形です。

(生徒) イベントごとにその都度集まってもらうような形でやっています。

(小屋松委員) 定例会みたいな形でやっているわけではなくて、行事を中心に組み立てている。

(生徒) そうです。基本的にはそういう形です。

(小屋松委員) オープンキャンパスを自分たちでやろうというのは、どういう発想で出てきたんですか。

(生徒) 私が直接聞いた話では、学校でオープンキャンパスをやるからちょっと手伝ってほしい。例年だったら先生方が主体だけど、次から学生主体の学校に変わっていくということだったので、こっちから新しく学科が変わるにあたっての時間割の組み方だったり、実際に授業を受けているの体験談というか、実際にそれをしっかり伝えるために授業を行ったりとかという形で携わろうというふうに話が来たって聞きました。

(小屋松委員) 結果どういうふうに変わりましたか。先生たちでやっていたオープンキャンパスと学生自治会でやったオープンキャンパスとの一番大きな違いはありますか。

(生徒) 私自身も入学する前にオープンキャンパス行ってなくて、去年のオープンキャンパスで、1日だけ役員をやったんですけど、私の個人的な意見としては、高校生の皆さんから、学生に学生が模擬授業とかも全てやったので、先生に聞くよりも聞きやすいというか、前年行った時よりも、何ていうんでしょう、ちょっと会話が増えたといいますか、聞きやすい環境ではあったのかなと。

(小屋松委員) 聞きたいことを聞けるような雰囲気が出てきたということですね。栗山さんは、オープンキャンパスに、どんな携わり方をしましたか。

(生徒) 自分は補助的な感じで、動かしたり、手伝ったりしたくらいです。簿記のことを話したので、軽資資格のことも話したり、それくらいですね。

(小屋松委員) 結構高校生の人たちは、やっぱり、やっているメンバーが学生さんだから、気軽に話かけられましたか。

(生徒) 結構話しやすくはあったと思いますし、質問とかも何人かは出ました。

(小屋松委員) 学生主導であったということを、高校生も雰囲気がいいなと感じたかもしれませんね。大きな違いがあったかどうかわかりませんが、話しやすいとあったので、そういった面でも効果はあったんですね。確かに今は、主体的にというか、自分たちでというのが、小中学校の教育理念の中に入ってきているから、自分たちで考えてつくっていかうと、そういう子たちがどんどん育ってくると思うんですね。そうなってきた時に、そういった子たちが入ってきて主体的にやっていくという、そんな時に学生自治会ができたというのは歴史的なことなので、大事に、発想を続けてもらいたい。この学生自治会で、運営上のことで学校に求めることや、やってきた経験を通して、何かありますか。

(生徒) 実際に私は、企画委員長として、今年度初めてやったのが新入生歓迎会のイベントで、これから私たちが考えているのが、スポーツ大会と文化祭をやってみたいなと思っていますが、専門学校なので毎日授業がある中で、その時間にあてられないというか。もっと学生時代の思い出をつくりたいという思いがあっているいろんなことを企画しているんですけど、それに対する時間配分とかが無いので、ちょっとほしいなというか。



(小屋松委員) 学校側にも考えてもらわないと、やりたいからこの時間くださいと言ったってカリキュラムがあるんだったら中々難しいところがあるから、先生方と一緒にやっていくというか、そういうところで時間を作り出すというか。学生自治会ができて、自分たちでいろいろやっていくって非常に大事なことだと思うんですが、学校という区切りの中でいけば、学校と一緒に同じ方向を向いてやっていくってこのスタンスだけは間違えないようにしないといけない。我々がどんどんやっていくからというようなことになっていくとまた、違ってしまうと思うので。そこは先生たちと一緒にやっていくのが、大事なことかと思います。学生が主として考えながらも、ここはやっぱり先生たちがと、どんどんぶつけていって一緒に作っていくっていう、そうなるといいなと思いました。最後に、授業改善を進める上での課題ということで、ICTの活用とか、多様な授業形態に対応した教室、専門人材の確保などがありますけれども、1番最初に池元事務長からありましたように、科目が増えてきたり、選択肢が増えてきたり、人の配置もそうだし、物理的に教室の配置もそうだし、いろんな問題が出てくるかと思いますが、これはむしろ学生さんたちよりも学校側の方にお聞きしたいと思います。心配事とか何かございますか。

(教員) まずはお金がないことですね。ここに来てびっくりするほど予算がなかった。後援会とかにお世話になってこういう機材とか購入している状態。去年は変わるんだという大きなチャンスでいろいろ改修の予算を付けていただいたり、特別に改革の予算で情報機器とか買っていたりしてるんですけども、これ1回で終わるわけではなくて、情報とかは常に最先端をいかないといけないので予算をとる努力をしていきたいと思っています。

(小屋松委員) ちゃんと教育委員会に通しとかないとですね。

(教員) 多分教育委員会としての局内予算も決まっているというところで、中々厳しいということは重々承知の上で。

(小屋松委員) 教育委員会もしっかり頑張って予算獲得はされてると思うんですけどね。その中でさらにここにくるとなると限られるから、その対応を頑張ってするしかないでしょうけど。大事なことですからね、教育ですから。将来の子どもに投資するっていうのは大事なことなので、子どものお金を削り取っちゃいかんと私は思います。それといろんな科目、新しい課程ができましたけれども、そうすると全部、今の先生たちでは当然もうカバー出来なくて、それをやっぱり外部からの講師を引っ張ってくることについての不安とかはどうですか。

(教員) 人材を獲得していくってところを今、まさにやっているところです。この科目を誰に教えてもらったら素晴らしい授業になるのかというところを精査していて、それなりにお金もかかってくるので、ここも予算がかかってくる。

(小屋松委員) 突き詰めていけば、全て最終的にお金がということになってくるんですけど、この物理的に施設とかで、こういったものが、多分、決定的に足りないんじゃないかなとか、これはあるべきじゃないかなとか、そういったものっていうのは特別ありますか。

(教員) この学校は作られて30年経って、見かけはとても素敵な建物なんですけれども、30年前の老朽化した設備で整えられています。その辺りの改修であったりとか、教室も固定制ではなくて選択制になってくるので、授業によって教室を使っていくような形になるので、今は小中学校と同じで一つの教室で自分のクラスとしてやっているものを変えていくため、それに対応するような施設の整備を予算をかけてすることも考えていかないといけない。

(小屋松委員) ということはもっと教室も、区分けするとか、

(教員) 学生さんはパソコンを持ってきたり、荷物を持って移動することが予想されるので、それに対応するような個別の入れ物とかを整備したいなと思っている。とても古いOAデスクで2人

掛けのテーブルで、椅子も硬くて、ずっと授業で使っていく椅子になるので、そういう環境を変えたいと思っていますところですよ。

(小屋松委員) あと何かICTの活用とか、専門人材については、多分担当課の方でも、一生懸命こうやったら、集める努力はするんだろうと思うんですね。何かほかにございませんか。

(教員) 学ぶ環境というのはとても大事なんだと思います。集中してもらうためにも、授業中もやはりきつそうといえますか、居心地が悪そうといえますか、腰をコンコンとしているのを見ると思う。観光はグループワークで考えてやっていくことがあるが、大きいと動かすのにも時間がとられてしまって、ちょっともったいないなと思う。

(小屋松委員) それは具体的にどういう形にすればいいんですか。

(教員) 移動するのに3~4人掛かりでないと動かせないような机なので、グループですぐに話し合っほしいという時に、時間がかかってしまったりする。移動しやすい机であったり、椅子であったり、少ない教室の中で臨機応変に一つの部屋を上手く使っていけたら良いなと思う。

(小屋松委員) 先生たちの話を聞いて、何か感じたことはありますか。

(生徒) 確かに、勉強できるのはできるんですけど、やっぱり、椅子は結構硬くて、「あ、痛いなあ」みたいなってのはやっぱりちょっと感じるの、そこは改善していただけるのなら是非と思います。

(小屋松委員) この種の椅子はここだけですか。

(教員) そうです。これは考える椅子っていう思考を高める椅子だと。空きコマが出てくるので、その時間どこで勉強していくのかということで。ここで打ち合わせスペースを作って、個別ブースで勉強したりとか、そういう場所を作っていないといけないということで整備させていただいた場所です。今日学生さんは、涼しいのでびっくりされてると思うんですけど、普段はここはお金がなくて、エアコンつけてないんです。

(小屋松委員) 今日だけなんだ。

(教員) 暑くて、寒いんです。中々みなさんここは集わない場所だったんですけど、勇気をもって暑い時、寒い時はエアコンをつけるということで使える環境にしていきたい。

(小屋松委員) もったいないですよ、ここ使わないと。これで意見交換を終了させていただきます。貴重な御意見ありがとうございました。